

# 学校における「子どもの貧困」問題への教育支援力を育む授業実践

— 教職大学院『子ども家庭支援の実際と課題』におけるアクティブ・ラーニング —

木村直子\*

(キーワード：子どもの貧困，学校，教員養成，アクティブ・ラーニング，教職大学院)

## 1. 問題意識

「子どもの貧困」は、2006年OECDの経済報告書(OECD, 2006)において、日本の子どもの相対的貧困率が非常に高く、OECD諸国内で唯一、社会保障等の給付を足した再分配後にも貧困率が上昇することが指摘され、問題が顕在化した。とはいえ日本における貧困問題は1970年代後半には既に問題化され社会学分野を中心に研究が進められていたが(岩田, 1990)、OECDのデータは非常にセンセーショナルなものとして受け止められ、これ以降「子どもの貧困」問題が「再発見」され関心が高まった。とりわけ阿部彩氏の『子どもの貧困—不平等を考える』岩波新書の出版は、専門職や研究者のみならず、多くの人々が「子どもの貧困」問題に関心を寄せるきっかけとなった。世論やメディアの後押しもあり、2013年に『子どもの貧困対策の推進に関する法律(子どもの貧困対策法)』が成立し、2014年より施行された。「子どもの貧困対策法」では、児童の権利に関する条約の精神にのっとり、全ての子どもたちへの発達保障、教育保障、生活の支援、保護者への就労支援、経済的支援を行い、子どもの現在及び将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないように、子どもの貧困の解消に向けて、国が子どもの貧困対策を総合的に推進することが掲げられている。この法に基づき2014年8月に『子供の貧困対策に関する大綱』<sup>1)</sup>が閣議決定され、「教育支援」「生活支援」「就労支援」「経済的支援」の各分野の基本方針が示された。また2015年に「子供の未来応援国民運動」を発起し、2017年以降には全府省庁を挙げての対策が講じられている。

現在、相対的な貧困の状況に暮らす子どもは、13.9%となっており(国民生活基礎調査の概況, 2016)、「およそ七人に一人の子どもが相対的貧困の中にある」と表現される。「相対的貧困」とは、「その人の生きる社会において、一人の社会の構成員として機能できない状態。社会生活に必要な資源が欠けている状態。」と定義され、「飢餓といった肉体的サバイバルが脅かされる状態」を指す

絶対的貧困と対比させた概念である(阿部彩, 2017)。

「子どもの貧困」を考える際には、生命に関わる飢餓の問題だけでなく、子どもが、子どもらしさや子ども時代を謳歌できない、現在の生活や将来に希望や夢が持てない、そういった課題に対応していくことが求められているといえる。

ところで2014年の『子供の貧困対策に関する大綱』における「教育支援」では、「学校は地域に開かれたプラットフォーム」として位置付けられ、「子どもの貧困」問題に対して地域における総合的な支援を推進することが求められている。学齢期の多くの子どもたちにとって最も身近で日常的な関わりのある学校が、地域と家庭を繋ぐプラットフォームとなり、苦境に立たされている子どもたちを早期に把握し、支援につなげる体制を強化するなど教育的側面から中心的に支援を行うことが期待されている。その期待に応え、学校が子どもの貧困問題のプラットフォームとして機能するためには、学校教員が貧困状況にある子どもの姿を把握し、適切に対応する資質能力が必要である。この大綱の内容を受け、近年には学校における子どもの貧困問題を取り扱った研究や学校における「教育支援」の手立てに関する研究が急増している(杉井・改田, 2016, 柏木, 2018, 石井, 2019; 栗原, 2019; 竹鼻, 2019; 川端, 2020; 長谷川, 2020)。

今後教員養成課程において、貧困状況にある子どもたちの抱える問題に適切な理解や支援を行うために必要な知識や技術、価値観など体系的な教育を行っていくことが重要である。さらに得た知識や技能を活用して、子どもの貧困問題の解決に向けた手立てを講じることのできる実践力ある教員を養成することが急務である。そこで本論文では、教職大学院に在籍する大学院生を対象に、「子どもの貧困」問題に対応できる実践力を身に付けることをねらいとした授業実践について報告する。

## 2. 本報の目的

本報は、教職大学院における専門科目【発達支援力】

\*鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教職系)

「子ども家庭支援の実際と課題」(1単位・演習)内で2019年度に実施した「子どもの貧困」をテーマとした授業実践について記述する。具体的には授業における教職大学院生の学びの成果を、授業展開に合わせて追うことで、学びの深化を報告する。その結果を踏まえ、教職大学院において「子どもの貧困」をテーマに学びを深めることの意義について検討する。本学の教職大学院の院生は、全員が現職教員又は将来教員となる院生であり、学校が子どもの貧困対策のプラットフォームとなるための授業を展開する対象として、最も効果的であるといえる。

### 3. 方法

#### (1) 対象とした授業の概要

対象とした授業は、教職大学院における専門科目【発達支援力】「子ども家庭支援の実際と課題」の授業であり、2019年度受講者は教職実践高度化系及び教科実践高度化系の13名であった。13名のうち現職教員は9名、将来教員となるため学ぶ院生は4名であった。授業の目的及び主旨・到達目標は次の通りである。「現代社会の家族に関する知識や家族支援の専門知識を得て、学校や地域において家族を支援するための理論や技術についての理解を深める。授業では、乳幼児期・学齢期の家庭教育や様々な困難を抱える家庭への支援の必要性をアセスメントでき、適切な支援を推進していく専門性を得るために、家庭教育支援や保護者支援の実践に関するグループ討論やロールプレイなどを行う。到達目標は、以下の2つである。①学校、地域、家庭が連携・協働し、家庭教育を推進していくために必要な専門的知識や技術を身に付ける。②「子どものウェルビーイング」を指向し、保護者の養育主体性を尊重する、家庭教育のあり方を考察する。③学校及び地域における保護者支援の方法について理解を深める。」<sup>2)</sup> 授業では、現代社会の特質と子ども・家族問題を踏まえ、現代社会における家庭教育支援の必要性や子ども家族支援の理論について学んだ後、具体的な家族問題について取り扱った。2019年度の授業で取り扱ったテーマは、「子どもの貧困と家族支援」・「発達障害のある子どもとその家族支援」・「虐待：社会的養護を受ける子どもとその家族支援」の3テーマであった。またこの授業では、地域における子どもの居場所(子育て支援拠点、子ども食堂など)への参加観察(1コマ)を実施した。参加観察は授業者から提示された複数の徳島県内の子どもの居場所(子育て支援拠点、子ども食堂など)から、1箇所のフィールドへ出向き、参加観察を行い、レポートを提出することとした。本報では「子どもの貧困」をテーマに複数回行った授業を取り上げ、「子どもの貧困」を考えるアクティブ・ラーニングによる学びを報告

する。

#### (2) 「子どもの貧困」を考える授業の展開

「子どもの貧困と家族支援」をテーマとする授業回は、フィールド演習も含めて3回であった。授業スケジュールは以下の表のとおりである。

12/13	子ども家族支援の実際と課題 「子どもの貧困問題」 ・「子どもの貧困」に関する講義 ・VTR教材を活用した演習
12/21	鳴門市斉田公民館 子ども食堂 “わいわい” 11時～
12/25	阿波市内アワーズ にこにこ子ども食堂 16時～
1/10	子ども家族支援の実際と課題 「子どもの貧困問題」 ・「子どもの貧困」についてのグループ討論
1/26	キッチンカーによる移動式子ども食堂 in 青葉保育園 10時～

12月13日の初回授業の開始時に、質問シートを配布し、「「子どもの貧困」からイメージされること、これまでに見聞きした中で感じていることを自由に記述してください。」に回答を求めた。その後、「子どもの貧困」に関する知識として、「子どもの貧困」が日本の中で注目されることとなった背景や社会状況、国連持続可能な開発目標(SDGs)における貧困問題の取り扱いとその関連、現在の日本の子どもの貧困率、「貧困」の定義、日本における子どもの貧困対策の現状、子どもの貧困に関する国内外の研究知見について講義を行った。さらに話題提供として、VTR教材「NHKスペシャル:見えない“貧困”～未来を奪われる子どもたち～」(2017年2月12日(日)午後9時00分～9時49分放送)を視聴した<sup>3)</sup>。VTR教材の視聴ではVTRの内容に沿ったワークシートを配布し、受講生がVTRの内容を深めながら視聴できるように配慮した。ワークシートの問いは「Q1 「相対的な貧困」と「絶対的な貧困」の定義をおさえましょう。違いは何でしょうか。」「Q2 VTRの中から、相対的な貧困の中で暮らす子どもたちの生活の実態・子どもたちの思い・親の思いを書き出しましょう。」「Q3 貧困の中にある子どもたちへの支援とは?①社会にできることは何か?②教員である私にできることは何か?③「見えない貧困」の問題への支援とは具体的にどのようなことが考えられるか?」であった。VTR視聴後、Q1及びQ2について受講生に回答してもらいながら全体で共有した。さらに次回の授業で「Q3の①社会にできることは何か?②教員である私にできることは何か?③「見えない貧困」の問題への支援とは具体的にどのようなことが考えられるか?」についてグループ討議をして深めることを教示し、準備として「子どもの貧困」に「私(職業的役割としての私・個人としての私)にできること、地域社会に

できること、社会にできることは具体的に何か」を考え、その具体策を一つずつカードに書き出し、持参するよう伝えた。

「子どもの貧困」をテーマとした授業展開は、日程上12月最後の授業回が初回であり、年明け1月が2回目の授業というスケジュールであった。そのため、12月の初回から1月の次回の間、具体策を考える余裕があり、自ら文献を調べたり、徳島県内で開催されている「子ども食堂」等への参加観察を行ったりする者もいた。

1月に実施した2回目の授業では、グループ討議を行った。グループ討議では、現職教員の院生と教職経験のない院生が混在するように、授業者が2グループに編成した。討議は、「全ての子どもが子どもらしく生きられる社会」のために「私（職業的役割としての私・個人としての私）にできること、地域社会にできること、社会にできることは具体的に何か」の具体策をディスカッションした。グループ討議後、話し合った内容を発表してもらい、全員で共有した。

2回の授業終了後、講義、VTR教材、フィールド研究、グループ討議を踏まえ、「子どもの貧困」についてのレポート提出を求めた。レポートの課題は、「社会的なハンディキャップを感じながら生きる子どもたちに、私（職業的役割としての私・個人としての私）にできること、地域社会にできること、社会にできることは具体的に何でしょうか？」とした。ただし受講生間に見られる学びの深度や授業内容の理解度に対する合理的配慮として、課題にガイドをつけた。課題のガイドは次の通りである。ガイド①：子どもの貧困とは何でしょうか。ガイド②：「子どもの貧困」とは、何が問題なのでしょう。ガイド③：何を目標に（何を目的に）、どんな支援ができるのでしょうか。ガイド④：「子ども家族支援の枠組み」を踏まえて、どの部分でできることなのか具体的に考えてみましょう。

## 4. 結果

### (1) アクティブ・ラーニングを意識した授業展開

授業展開としては、受講者一人一人のアクティブ・ラーニングを指向した。はじめに「子どもの貧困」を授業テーマとして扱う前に、これまでに持つ知識や経験から、「子どもの貧困」についてイメージすることや感じていることを、受講者に自覚してもらった【STEP0】。さらに、講義形式で「子どもの貧困」に関する知識や現状を専門的な見地から学んだ後、VTR教材を活用したり、フィールドに出向いたりすることで、実態を学び、「子どもの貧困」に関するインプットを促した【STEP1】。その後時間を置き、一人一人が「子どもの貧困」に関する対策を思考したり、考えた対策をグループ討論という形式で表

現したりするなどアウトプットを行うと同時に、他者の考えや意見を新たな学びとしてインプットした

【STEP2】。さらに授業後に課題を課すことによって、「子どもの貧困」について学んだ事柄を、受講者自ら振り返り、一人一人の学びを深化させた【STEP3】。これらSTEP0からSTEP3の一連の授業展開を通して、受講生が理解した内容・知識を活用し、思考力・判断力・表現力等が育成されること、そして受講者が今後の教員人生で活かすことのできる学びとして、定着させることをねらいとした。

### (2) 受講生の学び

#### 【STEP0】 事前イメージ

授業前の受講者のイメージや自覚されていたことは、「現代の日本の社会の中で“貧困”な状態にある子どもなんているだろうか?」「自分の身近には感じたことがない。」「自分の身の回りではあまり聞かない。」「子どもや保護者のつぶやきから漠然と感ずることはあった。」「助けを求めない?」「経済的に困っており、十分な養育ができない。」「子どもを産んでも育てられない。」「病院に行けない。進学が狭まる。」などであった。多くの受講生がこれまで「子どもの貧困」問題を、自分事として捉えたり、身近な問題として実感したりする機会がなかったことが表れている。

#### 【STEP1】

##### ① 「子どもの貧困」に対する知識

「子どもの貧困」が着目されることとなった背景や社会状況、国連持続可能な開発目標（SDGs）における貧困問題の取り扱いとその関連、現在の日本の子どもの貧困率、「貧困」の定義、日本における子どもの貧困対策や施策の現状、子どもの貧困問題に関連する社会資源、支援の方法、支援の枠組み、子どもの貧困に関する研究知見についての講義を行った。

受講生らは、国連持続可能な開発目標（SDGs）や日本における「子どもの貧困」の現状については、ニュースや新聞等で見聞きしたことはあるものの、具体的な数値や詳細な内容について把握している者はいなかった。また、「貧困」の定義である「絶対的貧困」や「相対的貧



困)、「貧困線」「貧困率」については、その概念さえ認知されていない状況だった。

### ② VTR教材の学び

VTR教材「NHKスペシャル：見えない“貧困”～未来を奪われる子どもたち～」(2017年2月12日(日)午後9時00分～9時49分放送)は、ワークシートにメモを取りながら視聴した。子どもの声や映像から、描かれている子どもたちの姿や思いなど把握した。視聴後、受講生が把握した内容を全員で共有した。VTRから、受講生が把握した「[貧困]の中で生きる子どもたちの姿や思い」や「[貧困]の中で生きる親の思い」等は、図1の通りである。

VTRの中には、「友達と遊びたいけれど、家に帰って家事をする子どもたち」、「家計を支えるためにアルバイトをする子どもたち」、「部活がしたい、進学がしたい、旅行に行きたい、親と一緒に過ごしたい、など自分のやりたいことを我慢し、それを「外からは見えないように」、周囲に気づかれないように「気を遣っている」子どもたちの姿があった。また「大人になりたくない(大人に対して希望が持てない)」「自分には価値がない」という小学生や「頑張っても報われない」現状への諦めを語る中高生の姿があった。さらに子どもが我慢していることを

わかっていても、どうすることもできず、「子どもを大人にしてしまい申し訳ない」「塾に払う月謝でお米が買えると思ってしまう」と話す、親のつらい語りもあった。

資料やデータを基に講義を聞くだけでは、なかなか自分事として捉えづらかった受講生らも、VTR教材から実感が生まれ、相対的貧困のなかに暮らす子どもや家族の実情に対する内在的な視点からの理解が深まった。

### ③ フィールドにおける参加観察の学び

鳴門市斉田公民館で実施されている子ども食堂“わいわい”や、阿波市内のスーパーマーケット「アワーズ」内で実施されている“にここ子ども食堂”，本学学生が「フードバンクとくしま」や徳島県社会福祉協議会等と協働し開催した保育園におけるキッチンカーを活用した移動式子ども食堂などに参加観察に出向いた。各フィールドにおいて参加形態に違いはあるが、子どもや参加された地域の方々や食事をともにしたり、運営者の方々からお話をきいたり、子どもたちと遊んだり、片づけを手伝ったりなど、実地での学びを深めた。参加した受講生からは、「子ども食堂はニュースなどで取り上げられているのを見て知っていたが、実際に行ったのは初めてだった」「子どもたちが自然に楽しく過ごしている姿があった」「一緒に食事をして楽しかった」「温かい雰囲気だっ

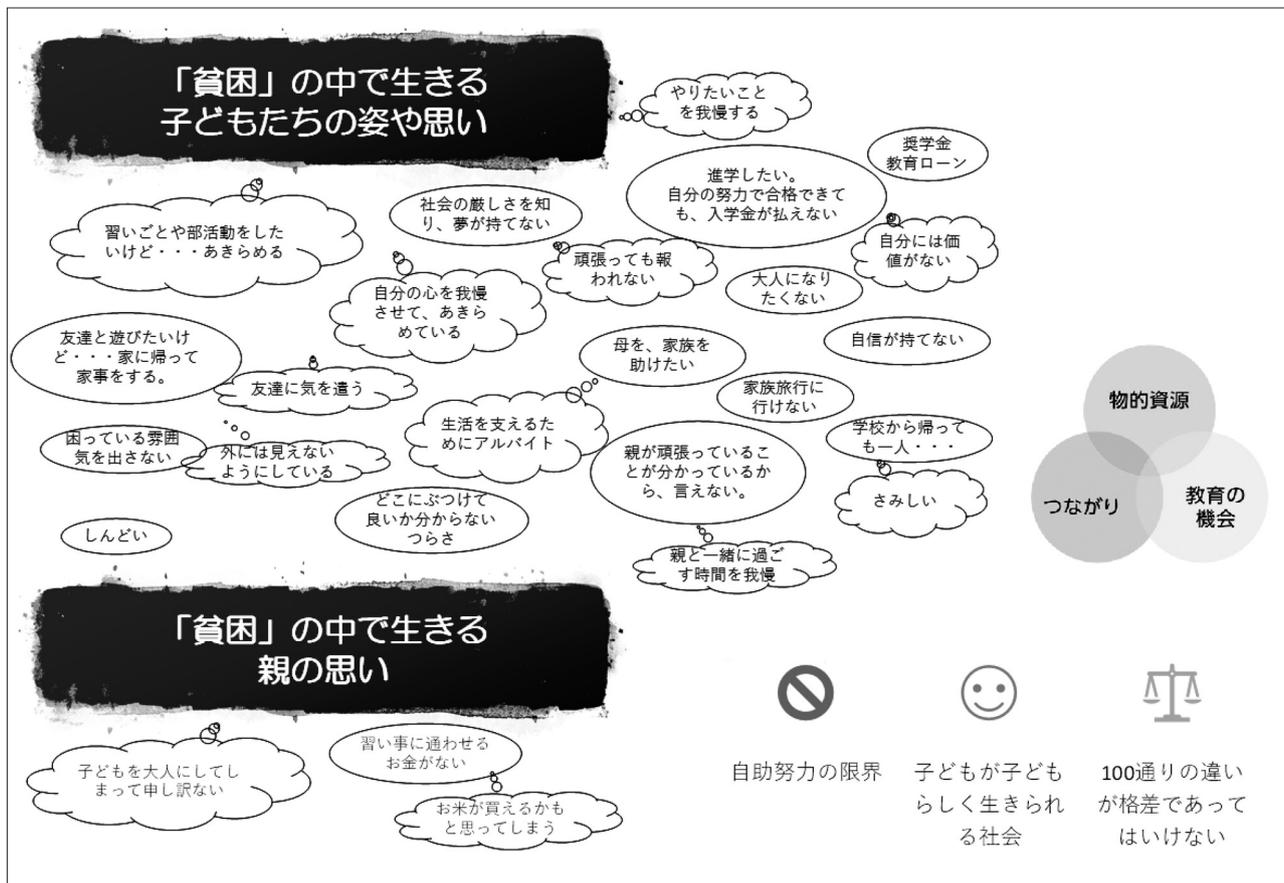


図1 VTR教材からの学び

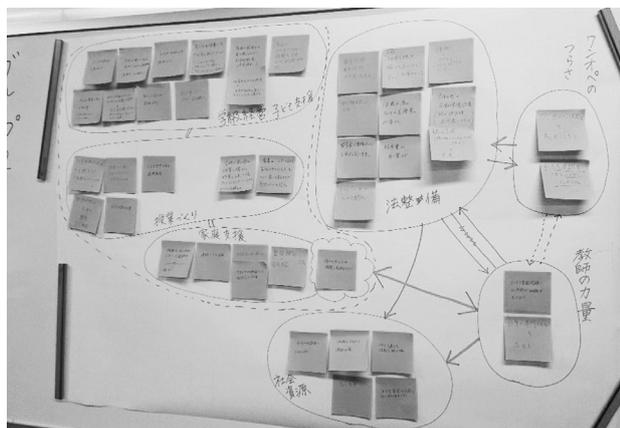
た「また機会があれば自分の身近な地域の子ども食堂にも行ってみたい」「参加できてよかった」「学校に戻ってからも、こういった場に足を運びたい」「親子の楽しそうな姿や子どもたちの遊ぶ姿が印象的だった」「地道な活動が持続的に行われていることに感動した」などの感想が出ていた。子ども食堂をはじめとする地域の子どもの居場所は福祉部局が管轄となっていることも多く、学校で働く院生たちにとっては、新たな経験となったことがうかがえた。実際に出向いてみると、誰もが受け入れられる温かい雰囲気と安心感を覚えると同時に、こういった場に教師が足を運び、知ることの重要性についても体感できたようであった。

### 【STEP2】グループ討議での学び

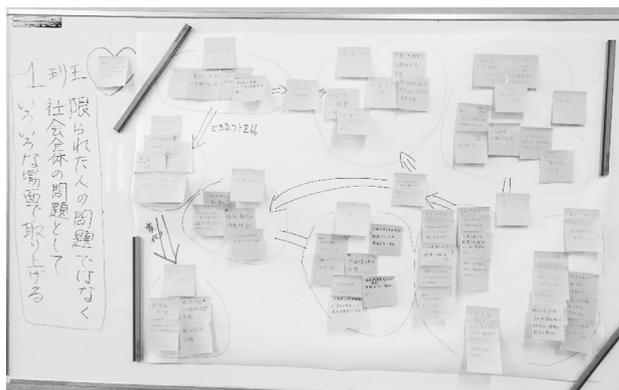
グループ討議では、「子どもの貧困」に、「私（職業的役割としての私・個人としての私）にできること、地域社会にできること、社会にできることは具体的に何か」についての具体策を、2グループ（A・B）に分かれ話し合った。授業者は「まずは皆さんが作成してこられたカードを互いに発表し、同じような内容ごとに整理するあたりから始めてはいかがでしょうか」と教示し、模造紙とマーカーを準備した。その後のグループ討議の展開は各グループ思い思いに進めてもらうこととした。受講生らは討議の過程の中で、準備してきたカードを類似した内容ごとに分類するだけでなく、分類された複数の内容ご



グループ討議の様子



A グループの討議結果



B グループの討議結果

とにまとめて命名したり、まとまり間の関連性をマーカーで示したりするなど、工夫して進められた。準備してきたカードを使用することで、全ての受講生が自分の意見を出すことができ、現職教員の院生の意見と学部卒業生の意見が等しく議論され、活発な討議が進められた。

グループ討議での学びは、グループ内で意見や考えを共有するだけでなく、討議結果である模造紙を用いてプレゼンテーション形式で発表し、全体で共有した。各グループの討議結果は、写真の通りである。グループの発表後には、「ここに出てきた対応策は考えるだけでなく、実行しなければ意味がない。実行するためには、フィールドに出て体感すること、そして企画し、行動することが必要だ」や「各グループの話し合いで出てきた対策には、類似したものもあるが、異なるものもあり、多くの具体策を知ったことで、今後学校現場に戻った際の選択肢や可能性が広がった」といった意見が聞かれた。

この意見を受けて授業者は、受講者らの考えた対策を表1のように再整理した。受講生らが考えた対策を全て並列し、グループ化して再編成した。グループ討議で話し合われた内容は、大きくは『教師として・教育現場でできること』と『社会資源・政策への提案』であり、『教師として・教育現場でできること』には、「学校づくり」として〈居場所としての学校づくり〉や、「学級経営」として〈家庭環境を把握する〉〈子どもと教師の関係づくり〉〈生徒指導における配慮〉〈周囲とのつながりを感じることでできる学級づくり〉、「授業づくり」として〈子どもの貧困〉を授業で取り上げる〈子どもの学力の保障〉〈社会性向上のための教育〉〈犯罪予防のための教育〉〈自己肯定感を育む道徳教育〉〈栽培の授業の充実〉〈家事についての教育〉〈お金についての教育〉〈職業に対する考え方の教育〉〈授業で使う準備物の配慮〉、「学校でできる支援」として〈学校での「食育」の充実〉〈学校カウンセラーの積極的活用〉〈学校でできる経済支援〉〈学校の場の活用〉、「学校における家庭支援」として〈保護者支援〉〈関係機関と家庭をつなぐ〉、「学校教職員の専門性を高める」として〈知識を得る〉〈研修会の開催〉〈専門スキ

ル（技術）の向上）〈倫理・人間性〉などが抽出された。また、『社会資源・政策への提案』には、「社会資源」として（地域での居場所づくり）や、「法制度・政策の整備」として（就労支援）〈経済支援〉〈生活支援〉〈教育支援〉〈新たなアウトリーチ資源の開拓〉〈社会へのアプローチ〉〈社会構造へのアプローチ〉、「当事者のエンパワメント」として、〈ワンオペ育児のつらさ〉などが抽出された。受講生の多くが小中高等学校の現職教諭や学校関係の

現場でいずれ働くことを目指している院生のため、『教師として・教育現場でできること』については、学校現場の実情に即した非常に具体的な対策が考えられていた。また、『社会資源・政策への提案』についてはやや具体性に欠くものの、日本の「子どもの貧困」の実情や政策に即した大枠を網羅できていた。<sup>4)</sup> なおこの一覧表は、今後学校における「教育支援」に役立つツールとなると考え、後日の授業時間に配布し共有した。<sup>5)</sup>

表1 「子どもの貧困」問題への具体的な対応策～2019年教職大学院『子ども家庭支援の実際と課題』Ver.～

教師として・教育現場でできること	学校づくり	居場所としての学校づくり	学校が楽しいと思える場所になるようにする
			学校が居場所になるように環境を整える
			学校が避難場所となるように環境を整える
			安心して過ごせる学校づくり
学級経営	家庭環境を把握する	その子の家庭の様子を知る	
		家庭環境を把握する	
		学級の子どもたちと家庭のことを話すようにする	
		スマホを持っているからといった持ち物だけでなく、家庭全体を知る	
		「子どもの貧困」のアンテナを敏感にする	
		家庭環境調査票などの情報を十分に心に留める	
	子どもと教師の関係づくり	子どもが教師と相談しやすい関係づくりをする	
		子どもの思いによりそい、話を聴く	
		何かのお手伝いをしてもらいながら、話を聞く	
		話を聴く	
		気になる児童には、十分に気を配り、コミュニケーションをとる	
		スキンシップをとる	
	生徒指導における配慮	子どもが放課後過ごしている場を時々訪問する	
		好きなこと・得意なことを発揮できるようにする	
		目標を持てるようにする	
		子どもの夢と一緒に考え応援する	
		子ども一人一人の良さや可能性に目を向けた教育の在り方を考える	
		一人一人を認める言葉がけをする	
		努力できる環境をつくる	
努力が報われる経験をする			
周囲とのつながりを感じることでできる学級づくり	弱点を克服するための援助をする		
	「大人っていいよ～」という肯定的なメッセージを送る		
授業づくり	「子どもの貧困」を授業で取り上げる	子どもが自分を支えてくれる存在を実感できるようにする	
		自分が周囲の人とのつながりを実感できる援助をする	
		「子どもの貧困」の内容を授業で取り扱い、自分だけじゃないということを知らせる	
		学校の授業で「子どもの貧困」を取りあげる	
	子どもの学力の保障	貧困がどのようなものであるか知ることができよう啓発する	
		身近な貧困の実態を知り、伝え、行動すること	
		子どもの学力を保障する	
	社会性向上のための教育	学習支援をする	
		学校の勉強を理解できるようにするための学力をつける	
	社会性向上のためのカリキュラム		
	犯罪予防のための教育		
	自己肯定感を育む道德教育		
	自己肯定感を育む道德教育		
	栽培の授業の充実		
	家事についての教育	学校で栽培の授業を増やし野菜を持って帰る	
		栽培の授業を通してベランダで野菜を作るよう指導する	
	家事についての教育	家事の仕方を知る	
		家族のために家事をすることは良いことであるという学級づくり	
	お金についての教育	小中学校において経済（お金）についての学習を行う	
		お金の使い方を丁寧に授業でとりあげる	
職業に対する考え方の教育	職業に対する考え方についての学習を行う		
	職業に対する考え方や重要性を学校教育で身に付けさせる		
授業で使う準備物の配慮	授業で使う準備物（調理実習・工作・実験）など家庭の経済力の差を感じさせない教育的配慮をする		

学校でできる支援	学校での「食育」の充実	朝食やおやつを提供		
		友達や教師と楽しく会話しながら食べる		
		学校カウンセラーとの時間を全員がとって把握する		
	学校カウンセラーの積極的活用	学校カウンセラーとの時間を全員がとって把握する		
		衣服（制服）を提供する支援		
	学校でできる経済支援	部活動・社会体育に対する援助（用具・費用）		
		学校に残る給食を持って帰っても良いことにできるようにする		
		学校の場の活用		
	学校の場の活用	子育て支援の場として開放する		
		園庭・校庭の開放		
		学校を核としたコミュニケーションの場づくり		
	学校における家庭支援	保護者支援	保護者の不安や悩みを聴く	
保護者と連絡帳を通した関係づくりをする				
連絡ノートの活用				
保護者と話す機会に「子どもの貧困」という視点をもちつつ臨む				
受けられるサービスを一緒に探す				
悩みや不安を解消できる選択肢（制度・サービス）を伝える				
関係機関と家庭をつなぐ		学校や幼稚園での相談会の開催		
		相談窓口を増やす		
		要保護対策協議会の活用		
		民生委員の方との連携		
		種々のサービスや機関と家庭をつなぐ		
		福祉関係機関の情報提供		
		学校が積極的に地域と繋がって情報収集		
		福祉行政とつながりを持てるような場を増やす		
		子ども食堂の手伝いに行く		
		学校教職員の専門性を高める	知識を得る	子どもの貧困問題について学び、知識を持っておく
				貧困に対する情報や知識を得る
				新聞を読む
学校教職員が法律・支援制度などを勉強する				
研修会の開催	子どもの貧困についての研修会を開く			
専門スキル（技術）の向上	一人一人の教師の専門スキルを高める			
	身近な子どもの貧困の実態に気付くことができる			
倫理・人間性	教職員が地域のボランティアに参加する			
	好印象を与える教師になる			
社会資源・政策への提案	社会資源		地域での居場所づくり	子ども食堂
				フードバンクの取組の充実
				SNSを使った情報交換の場
		児童館を中学生まで行ける場にする		
		中学生が行ける居場所を地域に作る		
		家庭ではできない体験ができる場		
		一日が楽しいものになるような場		
		遊べる場所・時間・物を確保する		
		たくさんの大人に見守られ関わりながら成長できるようにする		
		いつでも戻ってこれる「第2の家」をつくる		
	法制度・政策の整備	就労支援	非正規雇用者の労働環境の改善	
			親のメンタルヘルスの向上のために職場が取り組む	
		経済支援	親の就労支援	
			給食費の無償化	
			奨学金（教育ローン）を無利子にする	
			奨学金の充実	
		生活支援	18歳未満の子どもの医療費の無償化	
			寡婦・寡夫控除の充実	
教育支援	ひとり親世帯への支援			
新たなアウトリーチ資源の開拓	低所得者層への無料学習支援			
	学校以外での学習支援の場			
	アウトリーチにできるサービスを開発する			
	社会へのアプローチ	限られた人の問題ではなく、社会全体の問題としていろいろな場面で取り上げる		
	社会構造へのアプローチ	選挙に行く		
		選挙に積極的に参加する		
		選挙に出る		
		しかるべき人に話をする・社会活動をする		
当事者のエンパワメント	ワンオペ育児のつらさ	ワンオペ育児の大変さを声に出して言う		
		新たな連鎖を生まないように、しっかりとする		

### 【STEP3】授業後の課題レポートにみる学びの深化

「子どもの貧困とその家族支援」というテーマで行った講義や参加観察を終えた院生に、さらに「子どもの貧困」についてのレポートを課した。多くの受講者のレポートには、子どもの貧困に対する自らの叙述、これまでの経験に対する振り返り、教師である自分にできること・学校にできること、の3点が記述されていた。これら3点における院生の学びの深まりについて検討する。

#### ① 子どもの貧困に対する自らの叙述

レポートには、講義で学んだ知識やVTR教材から得た知識、自主学習として調べた内容から、「子どもの貧困」が自らの言葉で語られていた。多くの受講生が触れていたワードや内容を羅列する。カッコ内は、そのワードが使用されていた該当者数である。日本における子どもの貧困率の高さ(10)、ひとり親家庭における貧困率の高さ(2)、身近にある貧困問題(3)、相対的貧困の定義(12)、絶対的貧困の定義(7)、「見えない貧困」・「相対的な貧困」の見えにくさ(10)、子どもが子どもらしく生きることができない状況(10)、世代間連鎖(3)、自分に自信がもてない子どもたちの姿(10)、自助努力の限界(4)などがあつた。

授業開始当初は、自分事として語られることのなかった「子どもの貧困」が、講義や自らの調べ学習によって得た外在的な視点からの理解と、VTR教材やフィールド研究で子どもたちの姿や思いに触れることによって得た内在的な視点からの理解がすすみ、自らの言葉で「子どもの貧困」を語り叙述されるまでになった。

#### ② これまでの経験に対する振り返り

13名中7名の院生のレポートには、これまでの自分の経験に思いを馳せ、振り返る記述がみられた。現職者であれば担任等の学校園で関わってきた子どもや家族のこと、学部卒院生であれば実習やボランティア等でこれまで関わってきた子どもや家族のことを、「子どもの貧困」について学んだ「私」によって「今」、捉え直し考察されていた。レポート課題等において自分の経験を交えて記述することは定番でもあるが、レポート内の「今となっては確認できないが」「あの時は気が付かなかったが」「貧困について知らなかったので、気づいていなかったのかもしれない。」といった院生らの記述から、「子どもの貧困問題」についての新たな視点を持ったことにより、気づきが得られたことが推察された。

#### ③ 教師である自分にできること・学校にできること

レポート課題では、貧困といった社会的なハンディキャップのある子どもたちに、私（職業的役割としての私・個人としての私）にできること、地域社会にできること、社会にできることは何かを問うた。多くのレポートにおいて、授業において学んだ「子ども家族支援の理

論」の根幹である理念的な目標を立て具体的な方法を考えるという手法が踏まえられており、「子どもが子どもらしくあれるために（welfare）」「すべての子どもが未来に希望をもてるように（well-being）」「子どもが自立していけるために（子どもの自立）」「親が親としての役割を遂行できるように（親の自立）」といった理念的目標から、具体策が記述されていた。対応策としては、様々な提案がされていたが、全ての院生に共通することは、教師である自分にできることや、今後自分が教員として留意していきたいこと、学校にできることに関する記述であった。

具体的には「子どもと関わり合う教師が、子どもの貧困問題について学び、現状や子どもの貧困に関係する社会資源やサービス、援助資源などを最新の情報や自分の学校地域の情報を知っておくこと」「学校における「見えない貧困」問題に関する研修の実施」「子どもや保護者をスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーだけでなく、学校外の関係機関につなぐこと」「学校外の関係機関や専門機関との連携」「子どもの心の拠り所となる学級づくり」「子どもや保護者の拠り所としての学校の役割」「学力の保障」「すべての子どもに、自分がかけがえのない存在であると実感してもらいたい」「「見えない貧困」という新たな視点から子どもや家庭を見ていく」といった内容が記述されていた。これらはグループ討議で出ていた対策の中から、実際に自分が学校で実行するようになった場合どんなことに留意しようか、どんなことから始められるかなど、自分事として捉え直した結果が記されていた。どこかの誰かがしてくれる「支援」や「対策」ではなく、「私」がする実践が具体化されていた。

### 5. 「子どもの貧困」をテーマとした授業実践の意義

「子どもの貧困」問題に対応できる実践力を身に付けることをねらいとした授業実践の意義は、本論文の結果における院生の学びの深まりをみれば明確である。授業実践前の「子どもの貧困」のイメージでは「自分の身近には感じたことがない。」「自分の身の回りではあまり聞かない。」といったことが挙げられていたが、その後講義を受け、さらにNHKスペシャルを視聴することで、子どもの声や映像から、子どもたちの姿や思いに触れた。紙面での知識やデータだけでは、なかなか自分事として捉えづらかった受講生らも、VTR教材から実感が生まれ、相対的貧困のなかに暮らす子どもや家族の実情に対する内在的な視点を持ったことで、教師や保育者として自分たちにできることは何かという具体的な案を多く考えることができた。さらにグループ討議を進める中で、「その具体案を行動する」には、実際にフィールドに出ること、

体感すること、そして企画し、行動することが必要であることに気づき、フィールド実習を通して「行動」には仲間や組織の理解と協力が欠かせないことにも思いが馳せられるようになり、実践に繋がる学びを得ることができた。<sup>6)</sup> これはまさに、本授業のねらい「受講生が理解した内容・知識を活用し、思考力・判断力・表現力等が育成されること、そして受講者が今後の教員人生で活かすことのできる学びとして、定着させること」が十分達成されたといえる。

『子供の貧困対策に関する大綱』にも示された、学校が「子どもの貧困」問題において、地域のプラットフォームとして位置付くためには、学校現場において家庭と地域をつなぎ、子どもの貧困問題の解決に向けた手立てを講じることのできる教員の存在が不可欠である。しかし、子どもの貧困問題をはじめ福祉課題の支援の難しさは、その手立てや計画をマニュアル化できない点にある。一人一人の家族の在り方、家族の価値観、置かれた状況に合わせて、支援の目的、内容や方法を考えなければならない。したがって、本授業実践を行った意義は、子どもや家族の問題に誠実な関心を持ち、内在的な視点から理解される問題と、外在的な視点から理解される問題を自らの中で止揚させ、困難を抱える家庭への支援の必要性をアセスメントし、他者の意見や考えを取り込みながら問題解決の対応策や工夫を柔軟に具体的に考え、適切な支援を推進していく力を養ったことにあるといえる。

## 注)

- 1) 「子供の貧困対策に関する大綱」は5年を経て2019年12月に改定されているが、学校のプラットフォームとしての役割は変わっていない。
- 2) 鍵括弧内の文言は2019年度授業概要（大学院学校教育研究科）シラバスにおいて受講生に公開されている内容である。
- 3) 「NHKスペシャル：見えない“貧困”～未来を奪われる子どもたち～」（2017年2月12日(日)午後9時00分～9時49分放送）を教材として用いることについては、許可と了承を得て行った。
- 4) 研究目的が異なるため、単純には比較できないが、今回の教職大学院における受講生らの考えた具体的な対応策のバリエーションの多さは、先行研究で示されていた現場教員の意識調査（長谷川，2020）や学生の意識調査（杉井ほか，2016；石井，2019）によるものと比べ、圧倒的に多く具体性やアイデアに富んだものであった。
- 5) この教職大学院生らがアイデアを出した「子どもの貧困」問題への具体的な対応策～2019年教職大学院『子ども家庭支援の実際と課題』Ver.～の一覧表は、

同様に「子どもの貧困」問題をテーマに扱った学校教育研究科修士課程『幼年期福祉演習』、学校教育学部『社会的養護』の受講生らとも共有した。

- 6) これら授業の取組は2020年2月に開催された徳島県主催「子どもの居場所づくりマッチングフォーラム」において、大学における取組として発表し、パネル化した。

## 文献

- 阿部彩『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波新書，2008
- 阿部彩『子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える』岩波新書，2014
- 阿部彩「子どもの貧困問題への社会科学的アプローチ」、『学術の動向』22巻(10)，8－13，2017
- 長谷川万由美・前田春奈「『子どもの貧困』問題への教員の意識に関する研究」『宇都宮大学教育学部研究紀要』第1部(70)，3－18，2020
- 石井僚「子どもの貧困問題に対して学校教員の立場からできること：教職課程の大学生に対する意識調査」『次世代教員養成センター研究紀要(5)』333－337，2019
- 岩田正美「戦後日本における貧困研究の動向—「豊かな社会」における貧困研究の課題」、『人文学報(224)』p33－73，1990
- 柏木智子「子どもの貧困問題に取り組むケアする教員の葛藤と対処様式：教職アイデンティティ確保のための学校経営戦略」『学校経営研究』43，40－54，2018
- 川端健司「経済的困難を抱えた不登校の子どもに対する学校の家族支援の在り方」『同志社政策科学研究』22(1)，79－90，2020
- 栗原和樹「『子どもの貧困』をめぐる教師と福祉関連機関との連携：教師によるゲートキーピングと教員文化に着目して」、『教育と社会』研究(29)，35－46，2019
- 子どもの貧困白書編集委員会『子どもの貧困白書』明石書店，2009
- 厚生労働省「平成28年 国民生活基礎調査の概況」(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>，2021年2月確認)
- OECD“Economic Surveys: Japan 2006”2006 ([https://www.oecd-ilibrary.org/economics/oecdeconomic-surveys-japan-2006\\_eco\\_surveys-jpn-2006-en](https://www.oecd-ilibrary.org/economics/oecdeconomic-surveys-japan-2006_eco_surveys-jpn-2006-en)，2021年2月確認)
- 杉井潤子・改田仁実「子どもの貧困の現状と課題：教員が貧困問題に気付くための視点と支援の手立ての検討」『京都教育大学紀要(129)』93－107，2016
- 竹鼻ゆかり・朝倉隆司・馬場幸子・伊藤秀樹「養護教諭の語りから見た子どもの貧困と教育支援」『一般社団法人

人日本学校保健学会学校保健研究 60(6), 340 –  
352, 2019

UNICEF Office of Research (2017). “Building the Future:  
Children and the Sustainable  
Development Goals in Rich Countries” Innocenti Report  
Card14, UNICEF Office of Research